子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2009年7月　NO.150

「蟹付き壺」　高瀬哲男

〈もくじ〉

困難な課題への挑戦 …… 浜田幸作　2
伊野和紙から解く未曾有の金融危機のナゾ …… 田村秀男　3
「うどん学会」と「カツオのお茶漬け風ラーメン」 …… 坂本雅彦　4～5
出会いの海へ・一冊の本をめぐって① …… 前田由紀枝　6～7
漫画王国土佐の最古参漫画家　谷脇素文・川柳漫画 …… 守谷孝男　8～9
言葉の現場から16　続「坊っちゃん」のなぞを読み解く …… 広井　護　10
高知のギャラリー⑫　ナイトギャラリーの試み ― Buddha Bar ― …… 宇田卓生　11
高知市文化振興事業団　5月～6月の事業から …… 12～13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

困難な課題への挑戦

浜田幸作

三十年前、県教育センターにおいて、研修主事の美馬敏男先生のもとで研究生として学んだ時期がある。

美馬先生は私と同じ郷里で、私が地元の高校在学時代、同校で教鞭をとられていたことがある。指導力には定評があり生徒の間では大層有名な先生だった。体は小さいが、いつもはつらつとしておられ、いったん口を開くと、どこからそのような力強い声がでるかと思われるほど、大きな通る声で話されるので、誰もがシーンとなって聞き入ったものだ。話上手で、説得力があった。手が付けられないほどの問題生徒であっても美馬先生の前では素直で、誰もが畏敬の念を抱いていた。

センターでは、日常誰と触れ合う中でも礼儀正しく、丁寧な語り口で威厳があった。寸暇を惜しんで万巻の書を繙かれ、必要箇所を大学ノートに書き写し、何を質問しても知らないことはないほど博識であられた。普段の生活は、控えめで、謙虚で、必要以上のことは語られなかったが、人から頼まれれば断ることなく、人のためにはどんな苦労も惜しまず誠意を持って対応された。身をもって示された教育実践者としての生き方と高徳な人柄は、私の心に焼きついて離れない。

その美馬先生の生き方から私が学んだことはたくさんある。「本を読め」「必要なことはメモすること」「人の話を良く聴け」「人権意識には敏感であれ」「想像力を働かせよ」「教育に無駄金はない」「人の悪口は言うな」「良く考えてから行動すること」「相手の立場に立って考えよ」「人を推薦するということは、自分の評価が試されているということだから慎重に」など、私ができていることもできていないこともあるが、「五分以上話す時には、原稿を書く」ということや「常に自己研鑽に努めること」「教育には手を抜かない」ということは、肝に銘じていることでもある。

私は、教育は人格の完成をめざした「人づくり」であり、その求めるものは「確かな学力」と「豊かな人間性」であると考えている。教育ビジョンの達成には、組織の機能化と教職員のベクトル合わせが不可欠だが、「教育は人なり」といわれるように、教師の情熱と言行一致の実践によって、人は変わる。

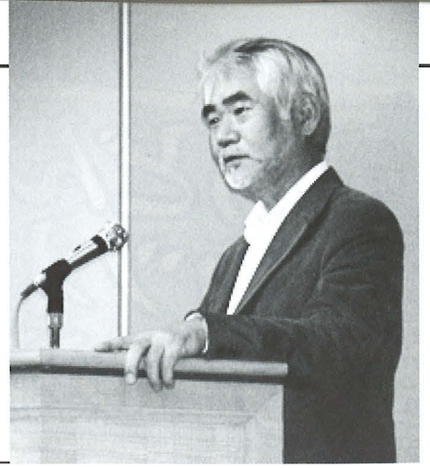
美馬先生は背中で、「範を垂れる教師から人は学び変革するから、教育の力を最大限に発揮しようと思えば、自己研鑽を欠かさず自己変革し、勇気を持って困難な課題に果敢に挑戦せよ」と教えてくれていたように思う。

今は、百年に一度という不況下における経済状況と少子化で、私学経営には厳しいものがあるが、先生の教えを生かし、真の「人づくり教育」を実践することによって、逆境を乗り切り、子どもたちに輝く未来の展望を拓きたい。人の一生に関わる大仕事である教育に全力を注ぎ、夢と希望の実現にこぎつけることができれば、喜びは苦労の何倍にもなってかえってくる。それが教育に携わる者の醍醐味であり、美馬先生もそうした喜びを味わっておられたに違いない。

（はまだこうさく／土佐女子中学高等学校校長）

伊野和紙から解く 未曽有の 金融危機のナゾ

田村秀男



「樹皮と樹幹との間にある薄い内皮をむき取り、細かに裂いて膠を加え糊のように撞きまぜ、これを紙状の葉片に引き伸ばす」（愛宕松男訳、東洋文庫「東方見聞録1」から）。今からおよそ七百数十年前、ヴェネティアの商人、マルコ・ポーロが描いた元帝国のある製紙作業の一幕だ。

この「樹」とは楮（コウゾ）のこと。ああ懐かしい。手漉き和紙の伊野町で育った頃の風景が鮮やかによみがえる。はやり歌を口吟みながら樹皮をむくおばちゃんたち。地獄の戦場の、なおこびりつく悪夢を振り落とせとばかり不乱に和紙を漉くおんちゃんたち。そこで働く母恋しさに和紙の乾燥板の間にたたずんでいた妹。

元帝国は楮を原料にした紙を薄くて丈夫な紙幣「交鈔（こうしょう）」に加工し、ユーラシア大陸に流通させた。シルクロードの長旅を経て大都（現在の北京）に到着した碧眼の商人たちは交易品の代金をフビライの印璽のある交鈔で受け取る。このお札で絹などを買い入れ、帰途につく。フビライ・カーンこそは「最高の錬金術師」とマルコは唸った。

交鈔はまさにモンゴル人が放った嚆矢（こうし）。人類史上初めて、金や銀との交換ができない不換紙幣で世界帝国を運営した。不換紙幣が世界通貨として再登場したのは一九七一年八月。このときニクソン米大統領はドルを金との交換義務から解き放った。ドル札は交鈔と同じく紙切れになったのだが、紙なんて古いと、現代の帝国の錬金術師たちは考えた。電子技術を使えばよいと。

市場で相場が決まる株式や債券など金融商品もドル札と同じく金銀の裏付けは皆無。だからマネーの一種なのだ、と米国のノーベル賞経済学者たちは考え、歴代のワシントンの政権に次から次へと金融商品の自由化を提案、実行させた。

自由化の極致が、ローンの「証券化」である。現金に換えられる株式などの証券はもちろんマネーと同類。ならば住宅ローンも証券にすればよい。証券化の作業にはコウゾや印刷機は不要。金融工学の専門家がパソコンのキーボードを叩けばいくらでも創造でき、コンピューターの記憶装置に入力される。買い手がつけばその名義や金額数値などの情報を暗号化して相手の電子帳簿に送れば取り引き成立。無限大の錬金術が金融自由化と情報技術革新により実現したのだ。カード・ローンなど他の証券化商品も合わせると、証券化商品の総額は米欧の国内総生産（GDP）をはるかに上回る。

だが、証券化商品ブームの根拠は住宅価格の値上がり、つまり住宅という不動産のバブルだった。バブルは崩壊し、コンピューター空間で創出された天文学的マネーがまるで大海原の蜃気楼のごとく忽然と消えたのだ。このマネーが生み出す購買力を当て込んでいた自動車、家電などの需要は一瞬にして激減、「百年に一度の経済危機」に世界が見舞われている。

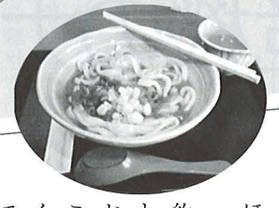
元帝国は百数十年続いた。手漉きの紙幣なら粗製乱造は無理、政治が安定しているうちは自ずとおカネの価値は保たれた。紙幣は帝国各地に浸透し、商工業を盛んにした様子をマルコは「見聞録」で詳述している。ドルの帝国米国はまだ三十八年。高度技術文明に傲り、強欲の余り仮想マネーを乱発した揚げ句、寿命が尽きようとしている。

（たむらひでお／産経新聞特別記者・編集委員・論説委員）

田村秀男プロフィール

1946年伊野町生まれ。伊野小、伊野中、高知学芸高校と地元で過ごす。
日経ワシントン支局特派員、米国アジア財団（サンフランシスコ）上級客員研究員、日経香港支局長などを経て、産経新聞社特別記者・編集委員。09年から論説委員兼務。早稲田大学政経学部非常勤講師（国際政治経済研究講座）。
著書に「人民元、ドル、円」（岩波新書,2004）、「世界はいつまでドルを支えるのか―金融危機と通貨戦争の行方」（扶桑社,2009）など多数。
ホームページ： http://tamurah.iza.ne.jp

「うどん学会」と「カツオのお茶漬け風ラーメン」



坂本雅彦

平成十八年三月十一日、「カツオのお茶漬け風ラーメン」が地元の新聞に取り上げられて早や三年の月日が流れた。私の勤めるホテルのビアガーデンに登場して以来、未だに人気が衰えないのに驚かされている。高知市内の方にならほとんど知られているまでになった。

平成十八年約一万二千杯、十九年約一万五千杯、二十年約一万二千杯と、来場者の約六〇%が「カツオのお茶漬け風ラーメン」を食べていることがわかった。このラーメンが多くのマスコミに取り上げられたことで、麺雑誌の編集長から、聞きなれない「うどん学会」という麺類の研究をしている組織の紹介を受けた。無類の麺好きの私にとってはひじょうに興味深いものであった。

「うどん学会」は平成十五年に香川県で設立され、文字どおりうどんを中心に、ラーメン、そば、そうめん、ビーフンなどの麺の起源、文化論的思考、関連産業の世界、経済社会への影響、まちおこしへの応用と、様々な角度から研究し情報交換し合う場として、毎年全国大会を開催している。四国を飛び出し、福岡や京都でも盛況であったようだ。

私は過去二回参加したが、最初に出席した徳島大会での発表の中で印象に残ったものが、香川県の瀬戸内短期大学の取り組みで、食文化「うどん」をテーマとした教育プログラムである。簡単に紹介すると、「讃岐うどんインストラクター」の養成を、栄養士養成課程に取り入れたもので、国からも予算が出ており大変ユニーク。団塊の世代向けの講座でもある。学生が香川県内のうどん店を回って味や製法を比較したり、県外へ出て行って、そこで地域住民に作り方を教え、そこから新しい発想を学んだりもしている。地場の文化と産業をきちんと勉強した人が増え、いろんな知恵が集まって切磋琢磨すれば、「讃岐うどん」の独自性というか繁栄はさらに強固になるだろう。

さて、ここで高知県の麺文化だが、まだまだ発展していないと思う。考えられる理由として、高知は自然の恵みがかなり豊富で、海、山、川の新鮮な幸を少し味付けしただけで大変おいしく食べることができる。それゆえに麺文化が発展しなかったのかもしれない。あるいは気候の問題も考えられるだろう。

高知県には、「地域資源」が二〇七品目もあるという(平成二十一年)。愛媛は一三九、香川は一一八、徳島は八九である。「地域資源」とは、産地の技術、農林水産物、観光資源といった地域の特徴ある産業資源で法律(中小企業地域資源活用促進法)に基づき県が指定したものである。

本県を代表する地域資源はやはり「カツオ」である。たたきは県外客に人気抜群である。そのカツオと組み合わせ新しい麺文化としたのが、手前みそになるが私どもの「カツオのお茶漬け風ラーメン」だろう。ただ残念ながらこのラーメンはわがホテルだけの提供で、社会的な広がりがない。そこで、「カツオ」に限らず高知県で取れるツガニ、テナガエビ、四万十青海苔、のれそれ、はも、金目鯛などをラーメン、うどん、そうめん、そば、パスタ、ビーフン等と掛け合わせて、高知独自の麺文化を発展させてはどうだろうか? たとえば、四万十テナガエビのパスタ、室戸金目鯛そば、のれそれそうめん、四万十青海苔ビーフン等々…。もしかしたら、私が知らないだけで、そのようなものがあるかもしれない!

近年、特に高知市内では、うどん屋、ラーメン屋が数多く出店しているのを見かける。そこで、大変に興味のあるラーメンをここ高知で発見したのでご紹介したい。六泉寺町にある、初代光福の「すっぽん鍋焼きラーメン」である。ここのラーメンには驚かされた。高知のご当地ラーメンといえば「鍋焼きラーメン」だが、この「すっぽん鍋焼きラーメン」は、それが進化したといっていいと思う。「鍋焼きラーメン」のスタイルにすっぽんのコラーゲンを入れかき混ぜて食べる。とろみが出てひじょうに美味、健康にも良い。麺を食べ終えるとスープの中に四万十川で採れた青すじのりを入れて飲む。ここでは、飲むというより食べるという感覚だ。川の香りが漂ってきて、また別の味が楽しめる。味付けはなんと、あのくせのある京都の「白醤油」であるが、それをうまく使いこなしている。味覚神経が大きく反応する。スープの素になる水は、サンゴと炭で濾過されているという。贅沢極まりない一品だ。つまり、このラーメンには、地域資源である四万十川の海苔が入っているのだ。すっぽんは現在他県の養殖ものを使っているが、将来的には、四万十川で捕れたすっぽんのみを使用したいとのこと。

私は思う。この「すっぽん鍋焼きラーメン」や「カツオのお茶漬け風ラーメン」のように高知の地域資源をうまく利用し、あっ!と驚くようなものを開発できる環境づくりが必要であると。たとえばイベントやコンテスト等を行い、優勝者には全国に情報が発信できるような仕組みを作る。高知の麺文化を発展させるために切磋琢磨し合うようになるのではないだろうか?

そういう意味でも、近い将来、ここ高知県で「うどん学会」が開催されれば面白いことになるだろうと、おおいに期待している。

(さかもとまさひこ/ホテル日航高知旭ロイヤル営業部マネージャー)

カツオのお茶漬け風ラーメン
意外な組み合わせに賛否両論の話題を呼んだカツオのお茶漬け風ラーメン。食べてみるとハマるかも

すっぽんラーメン
一度は食べてみたいと思わせる贅沢さ。コラーゲンたっぷりのスープは最後の一滴まで飲み干したい

龍馬の見た海

出会いの海へ・一冊の本をめぐって①

今に生きる龍馬

前田由紀枝

昨年、一冊の本が生まれた。『ほいたら待ちゆうき　龍馬』（高知県立坂本龍馬記念館編集、幻冬舎ルネッサンス発行）。

これは、記念館に設置している「拝啓龍馬殿」という投函箱に寄せられた、龍馬へのメッセージをまとめたものである。

一昨年、開館以来十六年間・一万二千通を対象に編集作業に入った。タイトルのほかに『心の辞書』というキャッチフレーズをつけたが、「これは龍馬へのメッセージではない。龍馬からのメッセージだ」という館長の思いがある。心に向き合い自分を知ろうとするときに必要な〝辞書〟であってほしいと。

一万二千通のメッセージからは、人生に迷ったとき、岐路に立ったとき、うれしいこと悲しいこと、人生の節目節目に、それぞれの人が龍馬に語りかけながら、自分自身に問うている様子が見えてくる。記念館では図書コーナーの机に向かい、一心に鉛筆を走らせる人をよく見かけるし、学生やカップルなど若い人の姿も目立つ。

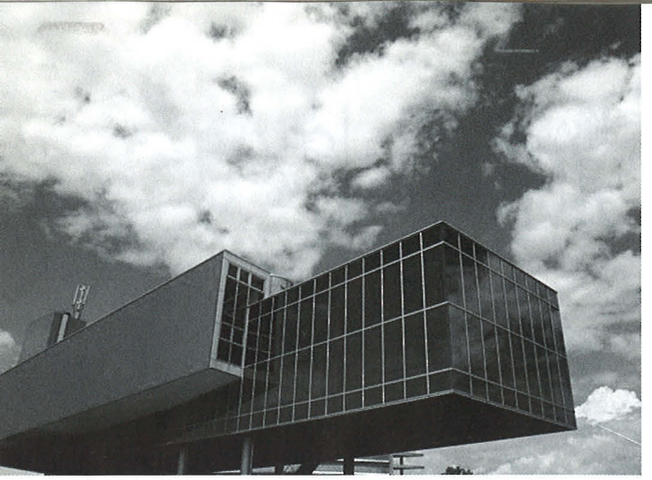
日本各地、外国の方からも寄せられるメッセージには、龍馬への思いとともに、さまざまな土地で生きている人々の息づかいがダイレクトに伝わってくる。

本には千五百人のメッセージを集録しているが、まず、三千人の方に手紙を出した。今度本を作るけれど、名前を載せてもよいか、近況なども聞かせてほしい、という内容である。

一千人は宛先不明で届かなかった。一千人は応答がなかった。しかし、残りの一千人の人から返事があった。十六年という歳月と、それぞれの歩みを感じるほかない。

うれしい。びっくりした。もう忘れていたが、過去の自分から手紙が

市川染五郎氏と（歌舞伎座楽屋、2007年9月）



来たようだ。覚えているとも、あのときのことは忘れてはいない。龍馬がいたから今があります。あの時龍馬に相談してよかった。―弾むような近況が返ってきた。

しかし、中には代筆した親からの返信もあった。愛する息子や娘を病気や事故で亡くした親たちは、思いがけない手紙に思い出し、涙し、知らなかった子どもの側面に新たな感動を覚えたのだろう。返信葉書には細かな文字がぎっしり並んでいた。

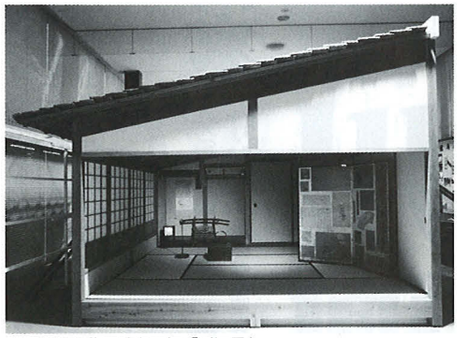
返信を読むうちに、館長は「館に来てくれた人たちを訪ねてみたい」とつぶやき始めた。各地から届く龍馬の友人たちの声は胸を打つものばかりだったからだろう。

ついに、龍馬に会いに来た人にこちらから会いに行こうということになり、その役が私にも回ってきた。ときめきを覚えた。どんな人がどんな所で待っていてくれるのか。初めて聞く名前の土地もある。何よりも、なぜこんなにも龍馬が慕われるのか知りたかった。

龍馬は生きている。記念館にいると強くそのことを感じる。

人は二度死ぬというが、一度目は肉体の死、二度目はその人のことを誰も語らなくなり忘れ去られた時だという。そういう意味では、今日ますます人々に求められている龍馬は、確かに生きているし、いっそう生き生きとしてきた感がある。龍馬は生まれ変わって生きているのだろう。

さて、訪ねるのは、十歳から九十一歳までの老若男女十六人。龍馬を演じた俳優、市川染五郎さんと上川隆也さんにもインタビューさせていただいた。高知の二人は館長が、上川さんは龍馬倶楽部の方が、それ以外の方を私が各地に訪ねた。八回に及ぶ県外出張だったが、三回目からは、さんさんテレビの斎藤晴江アナウンサーが同行取材することになった。それは、タイトでハードで、それでいて楽しい取材行であった。



再現された龍馬暗殺現場「近江屋」。
記念館見どころのひとつ

歌舞伎役者・市川染五郎さんについて少し紹介したい。

染五郎さんは歌舞伎座公演「竜馬がゆく」（原作・司馬遼太郎）で龍馬を演じており、舞台は今年九月の上演三回目で完結する。建て替えられる歌舞伎座（東京・銀座）でのさよなら公演とも重なって、私も楽しみにしている。

二年前の九月、初めての「竜馬がゆく」上演中の染五郎さんに、楽屋でインタビューをした。

伝統ある歌舞伎座の舞台で、「竜馬がゆく」という現代劇を演じるプレッシャー。それは予想を超えるものであったという染五郎さんは、言葉を選びながら丁寧に話をしてくれた。

「この仕事をしていると誰とも共有できない孤独があります。そんな私にとって、龍馬だけが頼りでした」。印象的な言葉だった。誰とも共有できない孤独。龍馬だけが頼り。今なお私はこの言葉を反芻している。

龍馬は考えて、考えて、考え抜いたことを自信にして行動したのではないか、という染五郎さん。龍馬を演じ抜いた役者の言葉は、なんと深い趣があることか。

見知らぬ人に出会う旅は、私の心にずっしりとした手応えを残してくれた。出会いの海とは、なんと広く深く果てしないものであることか。次号でお伝えしようと思う。

（まえだゆきえ／高知県立坂本龍馬記念館）

名古屋取材の途中。同行の斎藤さん（左）と

漫画王国土佐の最古参漫画家

谷脇素文

復刻版 川柳漫画

発行準備／企画／構成
守谷孝男（谷脇素文の親族）

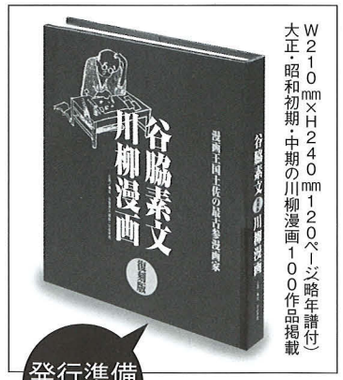
谷脇素文の川柳漫画は、みんなニコニコしている。気持ちが悪くなったり、カーッと腹が立ったりするような画はないだろう。画につられてニコニコしてしまう。素文作品の魅力はそこにあるのだろう。あくまで庶民的であり、大衆的である。

素文の川柳漫画は、大正そして昭和の時代の世相風物画史である。そのほのぼのとした愛と笑いが素文の川柳漫画の原点なのです。

一般に川柳と言えば江戸時代に独自の形式で発生したものと考えられているようだが、その源流は極めて古く、短歌、俳句と同じように、その起源をたぐると倭歌の発祥にまで遡らなければならない。

川柳とは十七音の一行詩で、人間または、その生活を主題とする、極めて親近感のある日本庶民の詩文学である。川柳ははじめ前句付と称された。その発祥は万治元年（一六六〇年）前後に河内、和泉地方から起こったと言われている。それが元禄年間（一七〇〇年）江戸にあらわれて大いに流行したが、中でも選者（点者）として柄井川柳という人物が川柳の選句眼が最もすぐれていたので、当時の人々は前句付の前句をはぶき単に付句、または川柳選そのものを川柳点と呼んだが、後にその点もはぶいて、総てこれを「川柳」というに至った。

俳句がおおむね自然を主題としているのに対し、川柳は人間を主題としている。時の移り変わり、風物を率直に捉え、鋭く風刺する。ユーモアを織り交ぜて表現されている。



W210㎜×H240㎜ 120ページ（略年譜付）
大正・昭和初期・中期の川柳漫画100作品掲載

発行準備進む！

《素文の活動》

明治二十四年頃、四条派の絵師柳本素石に師事して、本格的に絵の勉強をした素文は、後に高知新聞社に入社、小説の挿絵を描く傍ら、社会風刺漫画を紙上に発表し大いに読者を湧かせた。

大正七年、志を新たにして上京後は挿絵を描く一方、文吉漫画を創案、社会風刺の川柳とマッチして、いわゆる素文の川柳漫画へと発展する。昭和になってから川柳漫画は、谷脇素文の独壇場となっていく。

こうして川柳漫画の一派を成しえたことは、常識を必要とする新聞社生活に加えて、なにごとも知ろうとする素文の旺盛な知識欲と、趣味の多様性に負うところが多かったようだ。路地裏でのベイゴマ遊びから、犬猫馬その他動物の姿態の観察、野球、ラグビー、水泳などのポーズ研究、寄席風景、はては金魚、苗木、豆腐屋の呼び売り、街頭スナップ等々…。得意のスケッチに全く余念がなかった。

素文は多忙を極めた。講談社内でも編集者の間に素文争奪戦は華々しく展開され、各誌が競っての膝詰談判、居催促と猛攻に堪えかねていた。文字どおり息つく暇もないほどの忙しさが太平洋戦争開戦前まで続いた。

素文の川柳漫画は、過去三回にわたり、いずれも講談社から発行されている。その第一集「うき世さまざま」は、昭和元年十二月四六判三三四ページ、定価二円三十銭で、同三年十一月まで実に七十五版を重ねている。次いで昭和五年七月「いのちの洗濯」四六判三二八ページ、定価一円八十銭は、同十一年八月までにこれまた六十八版を発行している。

この「いのちの洗濯」の巻頭に〝かわやなぎ〟とは何だ、と問う人があった。と記している。こう言う人たちに、いちいち口や文字で説明していては双方が疲れます。そこで、川柳に漫画を添えたら面白味とともに、案外早く理解されるのではなかろうかと、未熟な筆をふるい、雑誌に載せたのが素文川柳漫画の始まりです。

昭和十七年三月には「川柳漫画傑作集」四六判二四〇ページ、定価一円五十銭を発行して、娯楽に飢えた素文川柳漫画愛好家の渇望に応えた。

やがて大東亜戦争、次いで太平洋戦争に移り、戦火の拡大とともに物資は欠乏した。本土空襲がくり返され、素文はやむなく仁淀川（高知県いの町）のほとり、静かな佇まいを見せる姪の守谷富子方に身を寄せた。

終戦後は夫人の生地多ノ郷の隣町である須崎町（現須崎市）に移った。昭和二十一年四月、ふとした足の傷がもとで、同月二十八日急に亡くなってしまった。行年六十八歳、辞世の句に〝敗れて唯山河あり焼野原〟がある。

（もりたにたかお／グラフィックデザイナー）

言葉の現場から 16

続「坊っちゃん」のなぞを読み解く

広井　護

小説「坊っちゃん」冒頭近くに、坊っちゃんの無鉄砲さを表す、以下のエピソードが記されている。

この文章には、授業の中で多くの中学生が興味を示す（しかし大人は意外に気がつかない）スリリングな「なぞ」が隠されている。注意してお読み下さい。

●　●

親類の者から西洋製のナイフをもらって、きれいな刃を日にかざして友達に見せていたら、一人が、光ることは光るが切れそうもないと言った。切れぬことがあるか、なんでも切ってみせると請け合った。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、なんだ指ぐらい、このとおりだ、と右の手の親指の甲をはすに切りこんだ。幸いナイフが小さいのと、親指の骨がかたかったので、いまだに親指は手についている。しかし、傷あとは死ぬまで消えぬ。

●　●

「なぞ」とは、坊っちゃんはどちらの手にナイフをにぎっていたのかということである。

「右の手の親指」を「切りこんだ」というのだから、坊っちゃんはナイフを「左手」ににぎっていたのである。なぜだろう？

中学生との授業だと、ここで意見が二つに分かれる。一つはA「坊っちゃんは左利きだった」という読み。もう一つは、B「坊っちゃんは、利き腕をさけて、わざと力の入らない左手でナイフをにぎったのではないか」という読みだ。

この論争はかなり白熱する。代表的な意見を拾ってみよう。

A「『親指の骨がかたかったので、いまだに親指は手についている』と書いているから、ナイフの刃は肉を通って、骨にまでとどいています。強い力で切りつけているからです。だから、ナイフをにぎっていたのは利き腕ではないでしょうか」

B「いや、最初は手加減するつもりで、左手でナイフを持ったけど、左手でも、つい勢いで強い力が加わることはあると思います」

A「『きれいな刃を日にかざして友達に見せていたら』というのは、利き腕でかざしていたと考えるのが自然です。そのときからかわれたから、そのまま衝動的に右手の甲を切りつけています。ということは、ナイフは左手で持っていて、その左手が利き腕だったと思います」

…というふうに、論争は決着してゆく。すると、坊っちゃんは左利きだったということになる。

ところが、これまで「坊っちゃん」は何度もテレビドラマ化されているけれど、その中に左利きの坊っちゃんがいたという記憶はない。

坊っちゃんが左利きであるという設定は、意外に知られていないようだ。あるいは、知られていたとしても、意味のない些事として注目されていないらしい。

だが文豪夏目漱石が、作品の冒頭近くで、何の意味もなく、主人公を左利きに設定するだろうか。そんなはずはないだろう。この設定には、何らかのメッセージが隠されていると考えるべきではないだろうか。

「左利き」は、「右利き」と対比される。右利きの人は多いが、左利きの人は少ない。「左利き」には、「少数派」という裏の意味があるのではないだろうか。

坊っちゃんは、時代に迎合する「多数派」ではなく、反骨の「少数派」として設定されている。「左利き」は、その隠された旗印ではないだろうか。

小説「坊っちゃん」の登場人物は、はっきり二派に分類される。「多数派」＝「損得で生きている人間」と「少数派」＝「損得ぬきで生きている人間」である。赤シャツ、野だいこは前者。坊っちゃん、山嵐は後者である。「損得」とは、近代資本主義の市場原理だ。

「親譲りの無鉄砲で、子供のころから損ばかりしている」という冒頭の一文も、「左利き」という人物設定も、明治の世を席巻しつつあった市場原理への、反逆ないし、反骨を暗示する表現ではないだろうか。

そう考えると、「西洋製のナイフ」も「西洋起源の資本主義」を象徴するアイテムと読める。「死ぬまで消えぬ」と語られる「右手の傷」は、作者漱石が、西洋近代文明との葛藤の中で受けた心の傷を投影したもの…という読みも不可能ではないだろう。――名作の細部は侮れない。

（ひろいまもる／土佐中学校教諭）

高知のギャラリー⑫

ナイトギャラリーの試み

－Buddha Bar－

宇田卓生

最高の空間で最高の空気をすう。そこには最高の仲間たちがいる。いつも探してた、そんな場所を。

そして、いつしか自分の店を持ちたいなと思い始めた二十代前半。いつもの顔触れ、くだらない馬鹿話で笑いが飛び交う午後。一つの灯火を皆で囲み思い思いのひとときに浸っているような夜…。そこにはいつも終わることのない音楽が流れ、素敵な音色に耳を傾けている。想いをめぐらせばそんな場面ばかりが次々と浮かぶ。素敵な夢を見ているようだった。

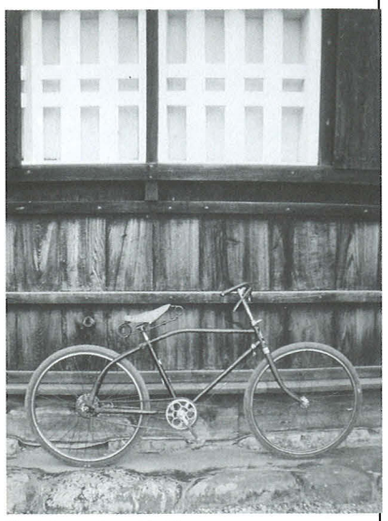
しかし、時とともに想いは色褪せ、砕け散った星と化していた。

ある時、星の欠片を手に取った。そして手のひらにのせ眺めてみると、とても綺麗だった。その星屑の一つ一つがまだ輝いていたのだった。わたしは星の欠片を拾い集めた…。

気がつくとその星屑たちは姿を消していたが、そこには一軒の店があった。はっきりとした形でわたしの目の前にあった。ここでギャラリーをやろう。わたしは考えた。列車が動き始めた。ドキドキする。

この店はそんな想いから始まったギャラリーです。たくさんの方がわたしに協力してくれました。わたし一人の力ではいつまでたってもここへは辿り着けてなかったでしょう。感謝しています。頑張ります！

（うだたくお）



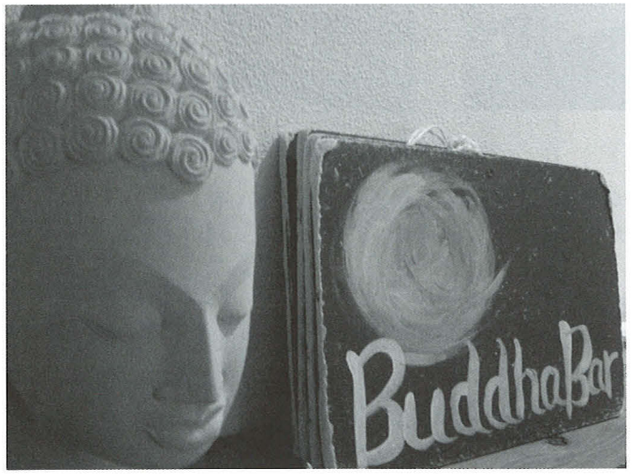
【7月の企画展】

「◎ 自転車展」　細川条二

7月11日（土）～31日（金）

過ぎ去った時代の匂いが残る自転車たち。ひとたび風を切れば太陽に輝くサスペンション、響くベルの音、汗ばむハンドルグリップ、夏の匂いを残し陽炎に消えていく。きっとあの頃の風が吹いているのだろう。ゆっくりとした時間の中を走っていく。

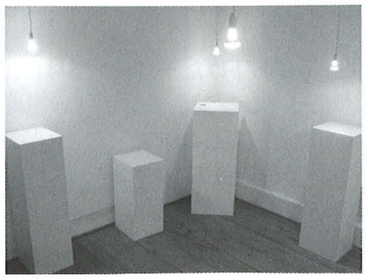
「酒のあてはビス一本、ベルーつ」―。そう語る細川さん。熱い想いがいくつも自転車の中に込められている。ストレートなこだわりを持って歩める人生は素晴らしい。細川さんの手掛けた昭和の自転車を眺めていると、ふとそう思えてくる。



【ギャラリー佛陀処（ブッダバー）】

アートから音楽、陶芸、写真、パーティーやワークショップ、フリマ等、ギャラリーのイメージにとらわれず、楽しいことを自由に表現できる空間として今年５月にオープン。

ギャラリー佛陀処
高知市上町 3-7-27
上町３丁目バス停前
（電車通り南側）
営業時間 12 時～19 時
定休日／水曜



【ナイトギャラリー】

営業時間 20 時～深夜３時
Good Music と一緒にアート＆お酒が楽しめます。是非ロックンロール!!

高知市文化プラザ かるぽーと
5月～6月の事業から

第61回高知市展 美術体感イベント
あなたダビンチ ぼくピカソ
6月7日（日）
かるぽーと前広場・中央公民館

第61回高知市展（5月30日～6月14日）の会期中の6月7日（日）に、今年も美術体感イベント「あなたダビンチ ぼくピカソ」を開催しました。

小さな頃から美術に触れることで子どもたちに美術を好きになってもらいたい、将来のアーティストや美術展の観覧者に育ってもらいたいとの願いで、小中高生を対象に平成15年に始めたこのイベントも7回目になりました。

前広場の特設テントを中心にかるぽーと館内とあわせて、絵画・日本画・書道・彫刻・工芸・ペン字・陶芸・デザインの8部門が出展し、約1000人が会場を訪れました。

フリーパスポート（500円）を首からぶら下げた子どもたちは自由にブースを回り、にぎやかに作品づくりにチャレンジ。前広場では墨と筆でエコバッグに絵を描いたり、和紙染め、大きな紙にのびのびと描くコーナーやボディペインティングなど。館内では陶芸の先生のアドバイスで粘土で思い思いの作品を作ったりと、目を輝かせて楽しんでいました。

谷川俊太郎・覚和歌子 詩のライブ&映画「ヤーチャイカ」上映会
5月31日(日)小ホール

日本を代表する詩人・谷川俊太郎さんと、気鋭の詩人・覚和歌子さんを招き、詩の朗読とお二人が監督した写真の静止画による映画『ヤーチャイカ』を上映しました。

映画は、恋人を失ったヒロインと、死を望みさまよっていた男とが、出会いと別れを通じて生きる力を取り戻していく再生の物語。女と男、人と自然、地球と宇宙などのテーマが、ナレーション（覚和歌子）、音楽、映像が一体となるなかで、静謐に語られ、とても印象深いものでした。

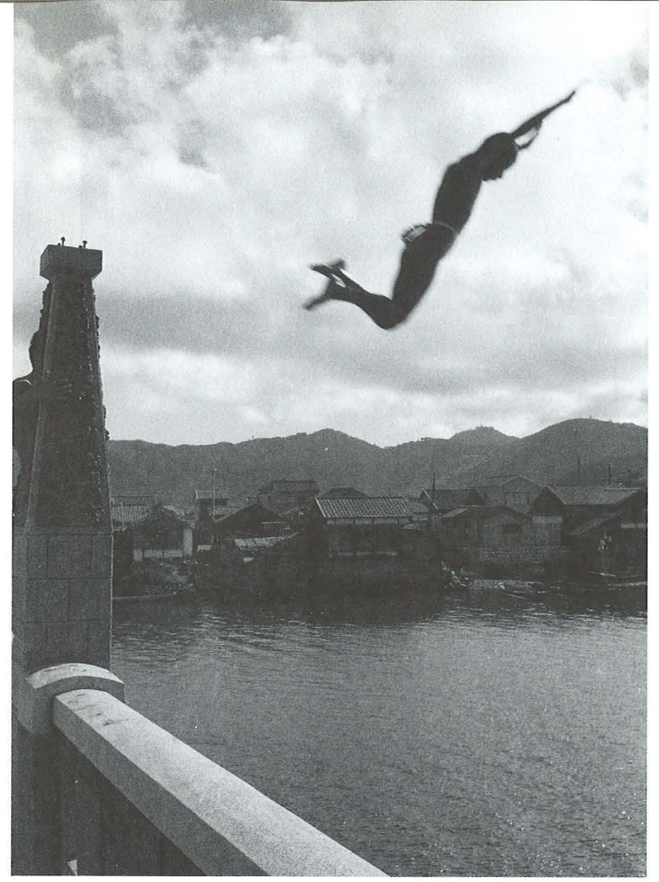
詩のライブは、それぞれの詩集から自作の詩を朗読、あるいは一つの詩をお二人で朗読するなど、ことばや表現についてのお話も交えながら、和気藹々と進みました。

アンケートでは、「感じるタイプの映画」「イメージをかき立てられる」「詩の朗読は初めてだが、すごく心に響きました」など、多くの方々が映画と詩の朗読に感動、第一線の詩人の「ことば」に感銘を受けました。

この企画はアンパンマンミュージアムの10周年企画として、高知市文化振興事業団が共催し、同じプログラムを5月30日に香美市でも開催しました。

高知を撮る

第25回写真コンテスト入賞作品



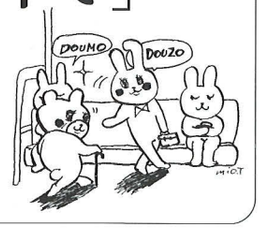
飛び込み

（昭和32年7月　高知市 雑喉場橋）

岡田　文夫

「バスの中で」

風俗歳時記



バスの中でのこと、年配の男性が乗り込んできたのを見て、席を譲ろうと学生がサッと立ち上がった。すると老人は「バカにするな、俺はまだ若い」と大きい声でその学生をにらみつけた。学生はバツの悪そうな顔をして席に戻った。

若さを大切にしようとする心意気はよい。世の中には高齢者扱いを好まない老人もたしかにいる。それに異議を唱えるつもりはない。とはいえ、素直に「ありがとう」と感謝の言葉を述べて、座席に座って何を損するというのか。なんにせよこういう言い様はないし、こんな強がりが、本当の意味で若さを支える力になるとも思えない。年寄りの冷や水といわれるのがおちである。

もっと「譲られ上手」になっていいのではないか。それが長年人生経験を積んできた者のゆとりであり、好意への報い方である。それぞれのケースに応じて、対応を適切に選択できるのも、年の功なのだ。「バカにするな」と大声を立てるところを、「ありがとう」とにっこり会釈を返して座席に着く。それで学生はバツの悪い思いをせずにすむし、周囲まですっかりしらけさせているが、これもなくなる。選択肢はまだほかにもあろうが、「譲られ上手」というのもさほど悪い選択ではないといえそうだ。

人は年齢を重ね経験を積むほどに、人生への理解が深まり、品性が磨かれるというのがかつての通り相場だったが、今はすっかり様子が違うようだ。歳を重ねることが品性を高めるのにあまり役に立たなくなっているのか、最近はキレやすい中高年が増えているという。先の例もその一つなのか。

加齢に対する考え方はいろいろあるが、一般的にいって東洋では年を取ることを成長、成熟ととらえ、西洋では衰退と見る。生きてきたキャリアを、なお自己の成長と他者貢献の糧とするのが東洋の生き方である。求むべきは内面に輝きのある加齢である。

（蒜）

第8回 詩のボクシング
Japan Reading Boxing Association　Official Poetry Boxing
高知大会

【本大会】
高知市文化プラザ　かるぽーと小ホール
2009年8月22日(土)　12:30開場　13:00開始
入場料
一　般：1,000円(700円)
高校生：500円(350円)
中学生以下無料
（　）内の金額は、身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者１名の料金

冒険セヨ！ アナタの言葉

「詩のボクシング」は参加されるあなたの、声と言葉の自由な“冒険の場”です。
そしてそれは観客席にいるあなたにとってもイマジネーションの“冒険の場”なのです。

主催：詩のボクシング高知大会実行委員会／財団法人高知市文化振興事業団
お問い合わせ：㈶高知市文化振興事業団　TEL 088-883-5071

風伯

ひとりで哀歓

八十歳を過ぎたご婦人と話をする機会があった。そのなかで、「旅をするならひとりに限る。独り旅をすることで哀歓を味わうことができる、とウチのが生前いつも申しておりました」、と言ったのがとても印象に残っている。

確かに私もひとりだし、必然的に独り旅をするのだが、ひとりでいるとどこか寂しげに見えるようなのだ。とくに連休などは家族連れや恋人同士がほとんどで、独り旅の人を見かけると、ことさら寂しげに見えてしまうのは確かである。飲み会などでも、ひとりで手酌で飲んでいると、「まあ！」と特別なものでも見つけたように「ダメダメ」といってお酌をしてくれる。されるままにしているが、ほんとうのところは大きなお世話なのだ。ことほど左様にひとりは「ダメ」であまりに「寂しげ」であるようなのだ。

どうにもひとりでは居づらい世の中ではある。レストランとか居酒屋などは、ひとりだとどうしても敬遠してしまう。カウンターのある店であっても、なお「ひとり」でいる居心地の悪さはある。こちらは「ひとり」を楽しんでいるとまではいわないにしても、ひとりだからといってけっして寂しくはないのだ。だから「救いの手」など要らないのである。

考えてもみて欲しい。ひとりでいることが厭であるなら、公の場にはひとりでは行きはしない。やんごとなくひとりでいても寂しいわけではないのだ。読書や考え事、哀しみに耐えているとき（うッ、ホンネ……）など、ひとりでなければ味わえないことも多いのだ。

（霖）

文化高知

定期購読のご案内
賛助会員募集中！！

賛助会費
2,000円
（年額）

財団法人 高知市文化振興事業団の
機関誌「文化高知」を
年６回お手元に。

お申し込みは・・・
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

お申し込み・お問い合わせ
(財)高知市文化振興事業団
Tel　088-883-5071
毎週月曜休業（祝休日は除く）

今号の表紙

「蟹付き壺（ガザミ）」

高瀬哲男

ガザミは一般にワタリガニとよばれ、幅25センチメートルほどの横長の菱形をした甲羅が特徴のひじょうに美味しい蟹です。

趣味の陶芸も6年目を迎え、単なる壺を作るだけでは物足りなく感じ、私が酒の肴でよく楽しむガザミを乗せると面白くなるのではと思い、薪窯で焼成しました。

（たかせてつお）

文化高知 No.150 [隔月発行]
2009年(平成21年) 7月1日発行

tsuki-neko ehon-ongakukai

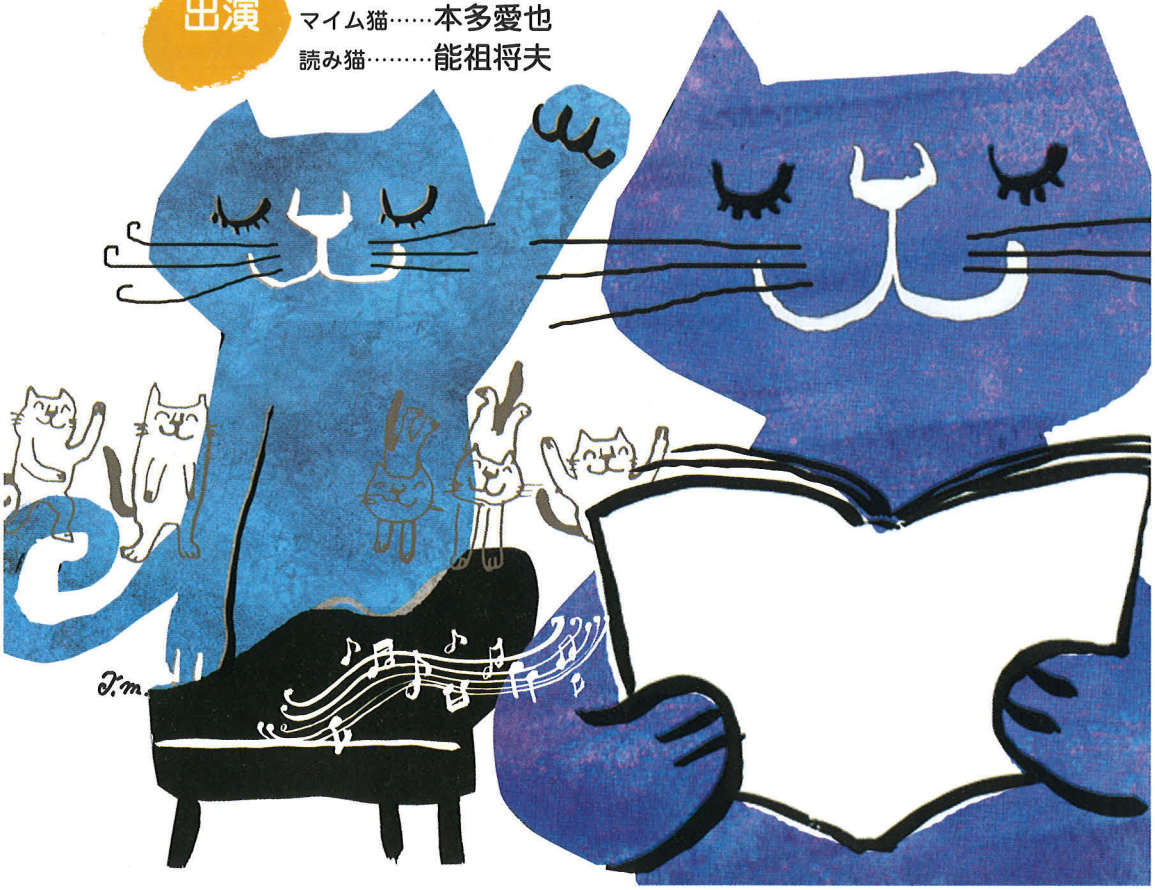
月猫えほん音楽会 2009

えほん×ジャズ=コドモもオトナもめちゃ2楽しいシアターライブ

出演

ジャズ猫……佐山雅弘
白猫……波多雅子
マイム猫……本多愛也
読み猫……能祖将夫

演出……吉澤耕一
美術……小竹信節



2009 9/19(土) 13:00開場 14:00開演 **高知市文化プラザかるぽーと大ホール**

入場料：全席自由 一般前売り 2,500円(当日2,800円)　高校生以下前売り 1,500円(当日1,800円)

チケット発売日 7/11(土)

チケット販売所：高知市文化プラザミュージアムショップ 088-883-5052 ／ 高新プレイガイド 088-825-4335 ／ 高知大丸プレイガイド 088-825-2191
高知県民文化ホール 088-824-5321 ／ 高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-8118 ／ イオンモール高知 088-826-8000

※本公演は3歳以下のお子様の入場はお断りします。託児をご希望の方は、生後6ヶ月のお子さまより託児室(無料)を用意しますので、事前にご予約ください。尚、定員に達し次第締め切らせていただきます。
※通信販売 電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座(加入者名：(財)高知市文化振興事業団 口座番号：01680-5-14869)に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料380円を合計した金額をご入金ください。

主催：(財)高知市文化振興事業団／RKC高知放送　助成：(財)地域創造　制作：こどもの城劇場事業本部
後援：高知市教育委員会／高知新聞社　協力：高知市こども劇場／高知こどもの図書館

お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 http://www.bunkaplaza.or.jp

高知市文化プラザ かるぽーと

宝くじは豊かさ築くチカラ持ち。
宝くじは、広く社会に役立てられています。

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071／郵便振替01680-5-14869